

平成 19 年度卒業論文

「装飾度」に着目した街路景観属性の研究

—物質的属性による善光寺中央通りの立面調査—

指導教員

坂牛 卓

信州大学工学部社会開発工学科

坂牛研究室

04T3093E 山田 卓矢

第 1 章

序論

- 1. 1. 研究の背景と目的
- 1. 2. 研究の意義
- 1. 3. 分析対象を決定するにあたり
- 1. 4. 分析対象
- 1. 5. 研究の位置づけ
- 1. 6. 既往研究

1.1. 研究の背景と目的

形は建築のモダニズムが構成する用語の三要素として空間、デザインとともに重要視された概念とされる¹。建築のモダニズム期において建築材料の主役となったのが新素材と呼ばれる鉄やガラス、鉄筋コンクリートである。新素材は自由な造形を可能とする可塑性、構造体全体として継手のいらぬ一体性、組積造などの伝統的な面(壁)による構造から開放された線(柱・梁)による構造の実現の可能性といった、それまでの建築材料には見られない特性を所有し、建築のモダニズムにおいて形への関心を向ける拍車となったとされる²。またモダニズムは形式主義(フォーマリズム)と結びつき、互いに影響力を与えたとされる³。元より形には形式(form)/内容(content)という対概念と形相(eidos)/質料(material)という対概念が存在する。このうち建築のモダニズムにおける形式主義ではこのうちの質料概念に関する議論がなされなかったとされる⁴。しかし本来、質料は形と切り離すことの出来ない対概念とされており⁵、建築において軽視することの出来ない概念であると考えられる。

近年においてモダニズムが取り扱わなかった質料概念に関する議論が活発にされるようになり⁶、建築外観に使用される材料の物質性を主題化した建築が登場するなど⁷、建築外観意匠においても質料への注目が集まる。このことから建築の表層が注目される近年において、建築外観意匠における質料概念の重要性を看取する。

そこで本研究においては建築立面を構成する部材の形を線分の長さ、質料を肌理による陰影の標準偏差値として位置づけ、形式と質料の二つの観点より建築立面の評価を行う。また本指標は建築物の表面に表れる様々な綾を数値化し得るものである。その意味で本指標を「装飾度」と呼称し、「装飾度」の観点より街路景観属性の一端を明らかにすることを本研究の目的とする。

1.2. 研究の意義

本研究の意義は「装飾度」に着目することで多様な建物が存在する現代都市において、建物の形態や様式に依存しない街路設計の指標を提示することにある。

1.3. 分析対象を決定するにあたり

1.3.1. 善光寺表参道中央通について

現在の善光寺は長野市の核心に位置する大寺院である。善光寺信仰は老若男女問わずにひらかれたという特徴を所有する信仰であり、古来より善光寺には全国からの参詣者が集まった。長野市中心街は近代に入り善光寺伽藍、本堂、山門、仁王門の中心軸に一致して計画された。この中心軸を南に延ばし、門前から JR 長野駅西口までが本研究の分析対象街路となる善光寺表参道中央通（以下、中央通）である。中央通は善光寺に繋がる街道、すなわち善光寺街道の一つとして多くの参詣者に利用された⁸。しかし現在の中央通周辺は近代において市街地化が進み、かつての善光寺街道としての面影が残されているところはほとんどない。それは建物の様式からも把握することができ、実に多様な建物が存在しているといえよう。

1.3.2. 門前町について

歴史にはそれを展開した人間の集団意識と地理的環境があるとされ、両者は必然的に結びつきあって集落が形成される。門前町はその一つとされる。また藤本利治は門前町の定義を「信仰の対象が全国的に拡大され特色ある景観、とりわけ社寺門前の街並みをなすに至っているもの」としている⁹。

門前町は社寺に対する信仰参詣が具現化し景観化された地域現象であり、機能的に連続性があるために現在に至るまで町の形態や構造が継承される場合が多い。しかし門前町自体には連続性があるとしても町をとりまく地域環境は変化してやまない。ことに近代における都市化という地域変動に対して、門前町はいかに対応するかが求められる。つまり参詣者にとっては門前町であるが、都市域住民にとって宗教都市はリクエーションセンターでもあり、その機能を果たすことによって都市圏に位置する門前町は存在の意義と発達があると考えられる。また藤本は著書『門前町』において近代における門前町の変貌として信州善光寺を取り上げ、

たとえば長野の場合をみると善光寺の門前町があり、北国街道上の宿場町であったのが、近代に入って地方行政の中心となったため、人口が増大して本格的な商業活動がおこり、北信地方を商圈とする商業都市へと変貌を遂げ、さらに第二次世界大戦前までは製糸・絹織物・紡績工業の中心として繊維工業都市となり、大戦中の疎開を契機として電気機器・印刷・鉄道車両などの工業も行っており、現在では最早単なる門前町ではない。(藤本利治、『門前町』、古今書院、1970、p. 157)

と述べる。以上より善光寺門前町は門前町としての歴史を保持するとともに、近代における都市化の影響を受けた場所であるといえよう。とりわけこの傾向が顕著に現れている中央通は街路景観属性に特徴が見られると予想される。

1.4. 分析対象

藤本の言及より善光寺門前町には街路景観属性に特徴が見られることが予想される。そこで本研究では善光寺表参道中央通りに面した建築の立面調査・分析を行う。大門交差点から中央通と昭和通の交差点までの約700m、建築数にして92棟を分析対象とする。

1.5. 研究の位置づけ

街路景観を構成する建築立面の既往研究には建築立面全体の輪郭線を定量化して扱ったもの¹⁰、建築立面の形態と素材が人間の視覚に与える影響を心理評価したもの¹¹、建築立面における色彩を定量分析したもの¹²、建築立面における色彩を心理分析したもの¹³などがある。街路景観属性の研究は対象を建築立面全体としているか、建築立面を構成している部材としているかで2種類に分類される。その上で定量分析と心理分析の2種類の分析方法があることから、大きく4種類に分類することができる。

本研究は街路景観を構成する建築立面に着目し、立面を構成する部材を定量分析することで街路景観属性を把握するものである。

1.6. 既往研究

本研究の関連研究として『都市的街路景観の定量的研究—1—』(伊藤恭行、梶山歩、上野淳、1989)と『建築壁画画像のテクスチャ解析に関する研究』に着目し、これらを概観することで本研究との差異を明らかにする。

『都市的街路景観の定量的研究—1—』（伊藤恭行 日本建築学会大会学術梗概集(九州)、Vol. 1989、p. 75-76)

伊藤による研究¹⁴は街路景観を構成している建物の連続立面から読み取ることが可能な数値データのみを用いて街路景観の特性を捉

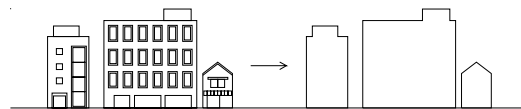


図 1 第一次輪郭線とは

え、これらを相対的に把握することを目的としている。ここでは芦原義信が著書『街並みの美学』¹⁵にて定義を行った「第一次輪郭線」を数値データ化している。第一次輪郭線とは街路に対して最前列に立ち並ぶ外郭線のことを示しており、最も単純な立面図を示している(図1)。第一次輪郭線を複雑な街路景観の特性を捉える端緒と位置づけ、これに加え周長、間口、面積、高さの平均、角数の計6つの指標より分析対象の比較検討を行う。この分析は建物を一つのヴォリュームとして把握するものであり、街路景観属性の一端を明らかにしている。しかし第一次輪郭線とは人間の視覚を通して認識されるものであるが、建物の立面にはそれ以外に多数の線分が存在しており、それらが視覚を通して与える影響を無視することはできないと考える。

そこで本研究では建築立面を構成するすべての部材の輪郭線を抽出することで、建築立面における線分が視覚に与える影響を極力考慮する。

『建築壁画画像のテクスチャ解析に関する研究』（川崎寧史、日本建築学会環境系論文集、No. 566、p. 111-118、2003)

川崎による研究¹⁶は壁面の構成要素の分解や輪郭線の抽出といった建築外観や壁面のモデル化を行わず、壁面画像の濃度分布をそのまま一つのテクスチャとみなし、これに対する統計量を視距離との関係で分析している点に特徴がある。分析方法は以下の通りである。

- ① 建築壁面の写真撮影：100m から 2000m の段階的な距離範囲で建築壁面の同一部分の写真撮影を行う。
- ② 壁面写真のデジタル化とグレースケール化：スライドフィルムに撮影した壁面写真をフィルムスキャナーにてデジタル化し、さらにカラー情報を破棄してグレースケール化する。
- ③ 濃度ヒストグラムに基づくテクスチャ特徴量の算出：各視距離での壁面写真のグレースケ

ール画像について、テクスチャ特徴量として平均・分散・歪度・尖度を求める。

- ④ 同時濃度生起行列に基づくテクスチャ特徴の算出：③と同様にテクスチャ特徴量としてテクスチャの一様性、エントロピー、相関、コントラストをそれぞれ求める。
- ⑤ 算出結果の分析：上記の③、④のテクスチャ特徴量を視距離に応じて整理し、各特徴量についてその変化の様子を分析し検討する。

この研究は視距離の増大により建築外観の見え方が次第に判然としなくなる状態を計量的に把握する目的で行われているが、質料、とりわけ肌理を画像処理し数値化している点において川崎の分析方法は本研究の参考になると考える。

本研究は既往研究と異なり建築立面において認識できる線分をすべて抽出・数値化し、かつ画像処理によって肌理を数値化したものを統合して分析した点に特徴がある。

-
- 1 エイドリアン・フォーティエ 訳・坂牛卓、邊見浩久 『言葉と建築—語彙体系としてのモダニズム』 鹿島出版会 2006
 - 2 矢代眞己、田所辰之助、濱寄良実 『20世紀の空間デザイン』 彰国社 2003
 - 3 尾崎信一郎 「モダニズム美術と視覚性—グリーンバーグ、フリード、クラウス、ブライソンの批評に即して—」 藤枝晃雄・谷川渥 『芸術理論の現在—モダニズムから』 東信堂 1999
 - 4 坂牛卓、谷川渥 「建築の質料とモダニズム—美学のフィールドからの視線」 谷川渥 『芸術の宇宙誌—谷川渥対談集』 右文書院 2003
 - 5 山崎正和 『装飾とデザイン』 中央公論新社 2007
 - 6 谷川渥 『美のバロキスム—芸術学講義』 武蔵野美術大学出版局 2006
 - 7 矢代眞己、田所辰之助、濱寄良実 『20世紀の空間デザイン』 彰国社 2003
 - 8 小林計一郎 『善光寺と長野の歴史』 光風舎 2003
 - 9 藤本利治 『門前町』 古今書院 1970
 - 10 伊藤恭行 『都市的街路景観の定量的研究—1—』 日本建築学会大会学術講演梗概集(九州) Vol. 1989 p. 75-76
 - 11 井上知也 『心理量の〔形態〕・〔素材〕の分析—街路景観の「ゆらぎ」の研究』 日本建築学会大会学術講演梗概集 Vol. 1998 p. 923-924

- 12 稲垣卓造 『色彩を刺激要因に含んだ街路景観の評価について』 日本色彩学会誌 Vol. 14 No. 2
p. 122-130 1990
- 13 木多道宏 『街路景観における色彩の心理効果：連続する建物群の基調色および単一建物の強調色の
変化「まとまり」評価等との関係』 日本建築学計画系論文集 No. 522 p. 239-246 1999
- 14 伊藤恭行 『都市的街路景観の定量的研究—1—』 日本建築学会大会学術梗概集(九州) Vol. 1989
p. 75-76
- 15 芦原義信 『街並みの美学』 岩波書店 2001
- 16 川崎寧史 『建築壁画画像のテクスチャ解析に関する研究』 日本建築学会環境系論文集 No. 566
p. 111-118 2003

第 2 章

装飾について

- 2. 1. 20 世紀における装飾論
- 2. 2. グリーンバーグと抽象表現主義
- 2. 3. 近年における装飾論

2.1. 20世紀における装飾概念

2.1.1. 装飾の死滅

アウグスト・シュマルゾーは動植物や人物などの形をした装飾や宗教的象徴などのパターンは意味や目的を持つとして不純なものを含んでいるとし、アラベスクのような幾何学パターンなどが純粹形式を表す装飾として扱っている¹。そもそも形式(form)には内容(content)という対概念が存在し、シュマルゾーの純粹形式とはこのうち内容を排除し、形式のみを取り扱ったものである。これには20世紀が物事の純粹化への強迫観念に駆られる風潮にあったという時代背景が反映したとされる²。その上でハーバード・リードは装飾をそれ自体意味や構造を持たない純粹形式であるというシュマルゾーの主張に賛同し、装飾を抽象美術の境域に入れた。リードによればオーナメント(装飾)は美術ではなく美術に応用されることで価値を持つとしており、応用されたオーナメント(装飾)を応用美術と呼称し否定した³。さらにリードは機械を実用美術と呼称し、機械の持つ形態価値と抽象美術の形態価値とを結びつけ、『インダストリアル・デザイン』を提示する。これは現代におけるデザインの原型であるとされる⁴。海野弘によればリードの装飾概念には大きく2つの疑問があるという。ひとつは装飾が美術でないとする論拠があいまいなことである。リードは装飾を空虚な空間を埋めようとする本能として捉えているが、海野によれば装飾は規則性、構造を持つものであり、それ自体高度な文化的水準の成果であるとしている。装飾を幼児の殴り書きと同一視するリードの主張には疑問が残る。二つ目には抽象美術と実用美術が同一のものとして扱われていることである。リードは応用美術を否定することで装飾を消滅させ、新たに抽象美術という分野にデザインを取り込んだ。そして実用美術(インダストリアル・デザイン)はシンメトリー・リズム・プロポーションといった形態的価値を生み出すゆえに、同特性を所有する抽象美術として価値を与えられた。しかし海野によればパターンのみで実用美術と抽象美術の構造を同一視することはできないのである。続けて海野はシュマルゾーの主張には皮肉が孕まれていたとする。装飾を純粹形式として扱うことで装飾は抽象美術となり、また装飾は純粹形式として扱われることで内容・意味を失い、存在価値が消滅する。つまりいずれの道を辿ったとしても装飾を純粹形式として扱うことで、装飾は消滅するのである。しかしリードの言及は現在まで語り継がれることになり、シュマルゾーからリードにいたる装飾の純粹形式化は装飾の抽象美術化と無化という二点において、いずれにしても装飾は内容・意味を剥ぎ取られデザインとして表面上の形式つまりパターンのみを受け継がれる原因となったといえよう。

2.1.2. 装飾の意味・内容

モダニズムにおける純粋化への固執によって装飾は形式のみを語られるようになり、デザインとして近代に受け継がれることになった。これに対し建築家ロバート・ヴェンチューリは形式への注目は意味への関心を損なうとし、近代建築が装飾の意味と意味作用を無視してきたことへの問題提起をしている⁵。またヴェンチューリは著書『ラスベガス』において記号という考え、つまり象徴主義を唱えている⁶。ヴェンチューリは近代建築が折衷主義を放棄した際、同時に象徴主義も消去したとして、モダニズムにおける近代建築の批判をしており、ル・コルビュジエやミース・ファン・デル・ローエを代表とする建築上のモダニズムが引き起こしたユニヴァーサル・デザインを否定する。ヴェンチューリは

近代建築は、空間、構造、平面状の純粋な建築的要素を執拗に文飾化すること
に没頭した挙句、その表現は空虚でつまらなく、無責任でさえある無味乾燥な表
現主義になってしまった。(ロバート・ヴェンチューリ、訳・伊藤公文、『ラスベ
ガス』、鹿島出版会、1978、p. 137)

と語り、建築全体の形態を歪めた近代建築を「あひる」と呼称し批判の対象とする一方
で「醜く平凡な建築」と呼称される看板建築こそが建築の意味作用を豊かにするとして評
価をしている。ヴェンチューリの観点は装飾の本質を示すにあたり、重要な観点であった
と考える。装飾には形式以外に内容・意味が存在し、モダニズムにおける装飾概念がその
うちの形式のみを扱ったことに対する問題提起がヴェンチューリによって発生したのであ
る。また海野はヴェンチューリと同様、装飾から内容・意味を消滅させることはできない
と主張している。

つまり、装飾は「純粋性」を求める現代の芸術論やデザイン論のまったく枠外
にあり、むしろ考古学や文化人類学の領域で扱われてきたというのが装飾の固有
の事情であり、逆に言えば、芸術論やデザイン論では装飾を扱えないから、抽象
美術の中に装飾を入れるのは不可能なのである。[…中略…]「装飾」を捉えるに
は、その深さ、すなわち意味または構造が明らかにされなければならない。(海野
弘、『装飾空間論』、美術出版社、1973、p. 22)

海野の記述より装飾の本質を探るには、装飾の形式と内容・意味を捉える必要がある。海野は続けて装飾が語られなくなったとされる 19 世紀後半のウィーン学派による装飾概念を考察すべきであると語り、さらに装飾の本質を探るには言語論からはじめなければならないとし、装飾と言語との関連性を示している。

装飾の所有する意味や内容とは何を示しているのだろうか。ヴェンチューリは建築の形式を否定し、意味作用を重視しているが意味を文字(text)として捉えたことによって象徴主義は消滅した。現代において装飾の意味・内容を語ることは困難であることから、次項より装飾の形式のみを受け継いだ抽象美術(デザイン)を考察することで装飾の特性を概観する。

2.2. グリーンバーグと抽象表現主義

装飾は意味・内容を排除され、形式のみを受け継いだことによってデザインや抽象美術となった。そこで近年における抽象美術の動向を概観し、考察することで装飾との関連性を見出す。

2.2.1. グリーンバーグとカント

形式主義(フォーマリズム)批評は 19 世紀後半の印象派に始まるモダニズムの美術とともに発達したとされ⁷、クレメント・グリーンバーグは抽象表現主義を形式主義と連結させることで美術としての価値を語った。美術作品を視覚芸術として成立させている形式に着目したグリーンバーグの批評活動は形式主義批評として知られており、谷川渥によればグリーンバーグの形式主義の背景にはカントによる『純粋理性批判』の概念が存在するとい⁸。ここでグリーンバーグの形式主義を考察する上でカントの『純粋理性批判』について概観する。

カントは『純粋理性批判』において悟性(知性)と感性の合一によって認識がはじめて成立すると語り、さらに具体的な経験に出会うことが重要であるが、認識は単に経験から成立するものではないとしている。つまりカントの『純粋理性批判』は、認識は感覚から受け取る具体的な内容から成立するという考えの「経験論的発想」と感覚からではなく、

あらかじめ備わった知性の力こそ、真の認識の源泉であるという考えの「合理論的発想」の対立を意識したものである。ここでカントの認識論は経験について触れており、黒崎政男はカントの経験に含まれる「形相」と「質料」の対概念の存在に着目している⁹。経験には形相的側面と質料的側面の二側面が存在し、カントはこれを「悟性の自発性」と「感性の受容性」としている。黒崎によればカントは認識における結合、つまり現象に対する意味づけはすべて悟性の自発性の作用であるとしており、感性の受容性はその素材を与えるのみとしている。ここにおいて純粹悟性概念が見られ、この最終的であり根源的な自己意識をカントは超越論的統覚を呼称し、人間の最終的で再考の統一の役目を与えるとしている。つまりカントは悟性と感性の二元論を問題として扱いつつも、悟性を優越して扱っているのである。この矛盾は『純粹理性批判』の第一版から第二版への移行期において超越論においてカントの不安として読み取ることが出来る。第一版には悟性と感性の媒介としての存在に構想力が存在した。構想力は悟性と感性の両性格を所持し、第三の存在として扱われた。この段階において悟性と感性の二元論は崩壊しており、カントは第二版において構想力の存在を消した。しかし悟性が構想力の代わりとなることでまたしても感性と悟性の二元論は崩壊し、悟性による一元論となった。このことからカント美学においては悟性、つまり形相が重視されることになった。カントにとって美の対象は形相であり、質料は美の対象外なのであった。

2.2.2. グリーンバーグの形式主義

グリーンバーグの形式主義とは「純粹還元」を示しており、これはカントの『純粹理性判断』から由来するものである。これに20世紀が純粹化への強迫観念にとらわれていたという時代の風潮が後押しとなり、グリーンバーグの形式主義はカント美学と結びつくことになった。しかしグリーンバーグは芸術にとって最も大切なのは「質」であり、質すなわち美的価値は作品の内容のうちに生じるのであって形式のうちに生じるのではないとしている。ここにおいてグリーンバーグの形式主義は形式と質料の概念が不安定なものとなっていることが分かる。これはカントが悟性を構成力の代わりとして扱ったことにより悟性が感性の性格さえも帯びてしまったこと、つまり形相と質料の境界が曖昧になってしまったことがグリーンバーグの形式と質料に対する境界さえも曖昧にした原因であるといえる。ここでグリーンバーグの形式主義について考察する上で、形式の示すものを把握する必要性があると思われる。そこで形式の意味について概観する。

哲学において形式はアリストテレス以来、「形相」(form)の意味を担っており、「質料」(matter)の対概念として語られる。アリストテレスは形相を思考の上でしか切り離すことが出来ないものとしており、形相をものの認識される側面としている。その一方で質料をそれ自体では知られないものとして、質料を形相から切り離すことの出来ないものとしている。山口義久はアリストテレスの質料概念を 1.)形相の担い手としての基体という側面と 2.)ものを構成してそのものの成り立ちを説明する要素としての側面を所有するものとする¹⁰。ここにおいて形相の担い手としての質料は、基体(もとにあるもの)という言葉で説明されている。物質界において何らかの変化が起こるとき、そこには変化の前後で変わる要素と存続している要素とがあり、基体とは後者の存続している要素のことを示している。この質料は変化のもとにある基体であるので、属性の担い手としての実体ではなく、あるものを実体として成立させる形相のもとにあるものと理解される。しかし質料が変化の原因であると考えるとき、質料はものを構成してそのものの成り立ちを説明する要素として形相としての性格を帯びることになるとされる。

一方でヴェネデット・クローチェによれば形式(form)には内容(content)という対概念が存在するという。クローチェはカントの純粹理性批判に基づき感覚が受動的に受け止めるものを質料とし、これを直感によって形式を与えられる内容として扱った。また直感を表現と同一視し、これを形式として扱った。クローチェにあつては直感=形式であり、感覚=質料、内容なのであった。

以上のように形式には形相の意味合いが含まれるために、対概念として質料と内容が存在することになる。グリーンバーグのフォーマリズムはこのうち内容(content)を排除し、形式(form)と質料(material)を採用したものとされる¹¹。川田都樹子によればグリーンバーグの形式主義は各芸術ジャンルが各々に固有のメディアム(媒質)を尊重し、他のジャンルから借用している効果を排除するものである¹²。絵画における固有のメディアムとは二次元平面を示しており、それゆえ絵画においては三次元性の表現である陰影による客体のモデリングや遠近法などによる奥行き表現や、文学からの借用である作品の内容・意味は排除される。しかしグリーンバーグの形式主義は単なる絵画の二次元化を示すのではなく、美的理念である「質」、つまり質料が関係しているといえよう。このことからグリーンバーグの形式主義はマテリアリズムとも言い換えることができ、各々のメディアムにのみ可能な芸術表現を示し、質料への注目を示唆するものであるともいえよう。

さらにグリーンバーグは作品が所有する効果であるオプティカル(視覚的)・イリュージョンに着目し、その特性を以下のように述べる。

モダニストが作り出すイリュージョンは、人がその中を覗き見ることしかできない、つまり、眼によってのみ通過することができるような空間のイリュージョンなのである。(クレメント・グリーンバーグ、訳・藤枝晃雄、『グリーンバーグ批評選集』、勁草書房、2005)

つまりグリーンバーグのいうオプティカル・イリュージョンとは二次元平面であることを意識させながら、しかも空間を感じさせる効果であるといえよう。またグリーンバーグはハインリヒ・ヴェルフリンが提唱した近世絵画における二つの視点である線的/絵画的¹のうち、絵画的なものにオプティカル・イリュージョンの発生要因があるとし、ジャクソン・ポロックの作品(図1)を評価している。

川田によればグリーンバーグは芸術作品が内容を持つのは芸術作品が所有する効果ゆえであるとし、その効果の発生原因が形式的要素にあるとしている。ここにおいても形式と質料の混同したグリーンバーグの形式主義の性格が表れている。そもそもオプティカル・イリュージョンとは質料における色彩を用いた絵画的イリュージョンであり、カント美学において色彩は決して形式に取り入れられないのである。



図2 〈五尋の深み〉1947

以上よりグリーンバーグの形式主義は素材の色や材質感をはじめとする、現象として可視的なものをすべて形式と捉えた独自の形式主義であったといえる。これには1.) アリストテレスが質料を変化の原因として捉えた際、質料はものを構成してそのものの成り立ちを説明する要素として形相としての性格を帯びると述べたこと。2.) アリストテレスの形相と質料の二元論を根底に持つカントが形式に質料の性格を与えたことによって、形式と質料の境界が曖昧になったことが原因として考えられる。しかしカントは質料における色彩を美としては扱っていないことから、厳密にはグリーンバーグの形式主義とカント美学とは必ずしも一致するものではないといえよう。

以上をまとめると 1.) グリーンバーグの形式主義はカント美学との関連性があり、また 20 世紀の時代の風潮の後押しもあり、抽象表現主義と結びついた。2.) カントは超越論における構想力の位置に悟性の自発性(形相)を置き換えることによって、形相と質料の境界を曖昧にした。3.) グリーンバーグの形式主義は厳密にはカント美学と異なり質料における色彩さえも形式として捉え、現象として可視的なものすべてを形式として扱っている。4.) グリーンバーグは作品の内容を「効果」とし、質料が与えるオプティカル・イリュージョンの効果に着目しているということが出来る。ここから質料はグリーンバーグを介することで形式としての性格を有し、美術界において注目を集める存在になったといえよう。

2.3. 近年における装飾論

抽象美術はモダニズムを通して形式の純粹化が促進されたが、グリーンバーグの批評を介して質料概念に対する注目が集まるようになった。そこで近年における質料概念と装飾論を概観することで両者の関係性を探る。

2.3.1. 再考 アドルフ・ロースの装飾概念

アドルフ・ロースは建築における装飾を形の対概念として扱った人物として知られる。ル・コルビュジエは著書『今日の装飾芸術』¹⁴において

20 世紀において人間の批判基準は高まり人間精神の水準は向上した。我々の精神的要求もまた変わり、装飾よりもはるかに高級な分野がわれわれにふさわしい感情を与えてくれる。民族の文化が向上すればするほど装飾は影を潜めると断定することが正しいように思われる。(ル・コルビュジエ、訳・前川国男、『今日の装飾芸術』、鹿島出版会、1966)

と述べ、アドルフ・ロースによる『犯罪と罪悪』が建築における装飾との決別の要因であるとしている。アドルフ・ロースは装飾と機能的合理主義との断絶を主張した一人であり、装飾を犯罪学として扱った¹⁵。ロースの言及により建築界において装飾は消極的なものとして扱われるようになり、モダニズムを通して装飾が語られることはなくなった。しかし現代においてロースは決して装飾自体を否定したのではないという再考がされる¹⁶。

ロースは「被覆の原理」において建築における質料概念の重要性を述べる。装飾に対するロースの考えは、ゴットフリート・ゼンパーの考えを受け継いでおり、その見方によれば、建築においては被覆こそがそれを支える構造に先行する。そして被覆における最も大事な法則とは、被覆された材料が、当の被覆と間違えられないようにしなければならないという点である。この点からロースのマテリアリストとしての側面を伺うことが出来る。ロースは建築の表面にある装飾を排除し、地となる表面自体を見せることで素材の物質性を建築外観意匠としている。またロースは同書にて以下の記述をしている。

どんな材料もそれ固有の造形言語を有するものであり、他の材料の形態をとることは出来ない。形態とは材料の持つ使用適正と生産方法から生成するものであり、だから形態とは材料と共に、材料を通して生成するものだ。そしてどんな材料も、自分の形態系に手出しをすることを許さない。(アドルフ・ロース、訳・伊藤哲夫、『装飾と犯罪—建築・文化論集—』、中央公論美術出版、2005)

以上からロースは1.) 装飾自体を批判したのではなく、被覆された材料が当の被覆と間違われることを批判し、2.) 表面に張り付いたものではなく、表面自体が建築外観意匠になることを提示し、3.) 素材には歴史があり、言語との関連性があるとしていることが分かる。つまりロースは質料の物質感を建築外観意匠として提示し、質料の所有する歴史性から言語との関連性を示唆しているといえよう。

2.3.2. 藤森照信の言及

近年商業施設を通じて建築の表層に対する意匠が先鋭化されている。商業建築は建築の歴史において低い位置づけをされていたが¹⁷、近年では伊東豊雄によるトッズ表参道ビルや Herzog & de Meuron のプラダ青山をはじめとして、建築家による商業施設の設計が数多く見られる。近年において建築家が表層に対して抱く意識に変化が現れているといえよう。建築の表層という問題に対して建築史家藤森照信は建築家隈研吾との対談で以下の発言をしている。

ただ急に装飾をやれと言われてもできるもんじゃないんです。[…中略…] 装飾も無理だと分かっているんです。ただ自然の素材を追うところで装飾効果が生ま

れる。真っ平らな素材はありませんから。自然の素材の色は大丈夫だともわかっている。(藤森照信+隈研吾、対談・「構造と表層—そこに近代建築の偽りはなかったか」、『特集 表層の予感』、TOTO 通信、2007)

ここで藤森は装飾ではなく装飾効果という言葉を使っている。藤森によれば装飾には長い年月を経てつくられた歴史があり、それと同様の効果が自然素材にある。自然素材には装飾と同様に歴史があり、そのために人間の視覚には慣習が生じる。装飾というメディアムにはそれが用いられてきた歴史、美術史上の慣習が関係する。川田によればグリーンバーグはメディアムが伝達可能になるのは言語のような共通のコードとして美術史上の慣習があるからだとしていることから、自然素材と装飾には伝達可能な共通コードとしての作用があると考えられる。また藤森の自然素材に対する考えはロースのそれと酷似しており、ますます質料と言語との関連性を示唆している。

2.3.3. 鶴岡真弓の装飾論

鶴岡真弓は著書『「装飾」の美術文明史』において装飾と抽象美術との関連性を示唆する¹⁸。鶴岡によれば装飾は形式主義を徹底し、平面への意識を見せているという。つまり三次元にあるモノを二次元平面に落としこむことでモノの持つ形や質料を提示しているのがある。これは抽象表現主義が線や面や色が平面上にいかにか構成されているかを主題としたことで、色やかたちを通して人間には容易に見通すことのできないモノの威力を提示してきたことに等しい。ここから装飾と抽象表現主義による近代美術は不可分なものといえよう。また鶴岡は装飾美術とは形式が内容を生み出しつつ表れてくる現象としており、装飾の美術を語るうえで形式の重要性を言及している。また鶴岡は

そして言うまでもなく、色や線や形態を全体の調和の中に発見すると同時に、それぞれの部分のざわめきを感知することが、「装飾」と人間の関係に生起してくるのだと思います。(鶴岡真弓、『「装飾」の美術文明史—ヨーロッパ・ケルト、イスラームから日本へ』、日本放送出版協会、2004)

と述べ、装飾が視覚に与える効果について言及している。鶴岡は同書において装飾の形式から生ずる部分のざわめきを「めまい」とし、装飾の持つ特性の一部としている。その上

で「めまい」の発生原因を計量不可能性としており、装飾を構成する無数の部分が視覚と感情を通してめまいを感じさせるのだとしている。装飾とは可視化することのできないものを形式化する行為であり、そこに視覚芸術としての可能性を看取する。鶴岡の言及する「めまい」とは二次元平面の中に無数の部分、いわば無限性を感じさせるという装飾が所有する効果であり、これはグリーンバーグの言及する「オプティカル・イリュージョン」との関連性があると考えられる。グリーンバーグのオプティカル・イリュージョンは二次元平面性を所有しながらも視覚によってのみ看取することの出来る空間を生むものである。

以上をまとめると 1.) 近年において質料概念が装飾に代わる存在であるという議論がされる。2.) 質料は装飾と同様に歴史を所持しているため、人間の視覚を通して慣習を与える。3.) また鶴岡の言及する装飾の特性である「めまい」は二次元の中に無限を感じさせる効果を所有しており、これはグリーンバーグのオプティカル・イリュージョンとの関連性が見出されるのではないかと考える。

つまり形式、質料を取り入れたグリーンバーグの形式主義は近年の装飾界においても顕著に現れており、質料への着目がされるようになった。また近年において装飾の意味・内容ではなく効果と呼ばれるオプティカル・イリュージョンこそが装飾や抽象美術における形式主義の醍醐味であるといえよう。そしてそれは形式ではなく質料に表れるものである。

1 アウグスト・シュマルゾー 訳・井面信行 『芸術学の基礎概念』 中央公論美術出版 2005

2 川田都樹子 「フォーマリズム批評の理論—グリーンバーグの場合—」

藤枝晃雄、谷川渥 『芸術理論の現在—モダニズムから』 東信堂 1999

3 ハーバード・リード 訳・勝見勝 『インダストリアル・デザイン』 みすず書房 1957

4 海野弘 『装飾空間論』 美術出版社 1973

5 形は建築における思考の王者であり、ほとんどの建築家は疑いなしに形の諸側面に注目している。

ロバート・ヴェンチャーリ 訳・伊藤公文 『建築の多様性と対立性』 鹿島出版会 1982

6 装飾された小屋は文字通りの意味の層を付け加えるので意味を豊かにしている。

ロバート・ヴェンチャーリ 訳・伊藤公文 『ラスベガス』 鹿島出版会 1978

- 7 クレメント・グリーンバーグ 訳・藤枝晃雄 『グリーンバーグ批評選集』 勁草書房 2005
- 8 谷川渥 『美のバロキスム—芸術学講義』 武蔵野美術大学出版局 2006
- 9 黒崎政男 『カント「純粹理性批判」入門』 講談社 2000
- 10 山口義久 『アリストテレス入門』 筑摩書房 2001
- 11 谷川渥 『美のバロキスム—芸術学講義』 武蔵野美術大学出版局 2006
- 12 川田都樹子 「フォーマリズム批評の理論—グリーンバーグの場合—」
藤枝晃雄+谷川渥 『芸術理論の現在—モダニズムから』 東信堂 1999
- 13 ハインリヒ・ヴェルフリン 訳・海津忠雄 『美術史の基礎概念—近世美術における様式発展の問題』
慶応義塾大学出版会 2000
- 14 ル・コルビュジエ 訳・前川國男 『今日の装飾芸術』 鹿島出版会 1966
- 15 アドルフ・ロース 『装飾と犯罪』 訳・伊藤哲夫 中央公論美術出版 2005
- 16 後藤武 『特集—アドルフ・ロース再読』 彰国社 2002
- 17 五十嵐太郎 「表層から建築を考えれば」 『特集—「表層」の予感』 TOTO 通信 2007
- 18 鶴岡真弓 『「装飾」の美術文明史—ヨーロッパ・ケルト、イスラームから日本へ』
日本放送出版協会 2004

第3章

データの作成方法

- 3.1. 線分の構成
- 3.2. 面の構成
- 3.3. データの作成方法

3.1. 線分の構成

ハインリヒ・ヴェルフリンは近世絵画の様式を線的/絵画的と分けたが¹、線的/絵画的の境界線は視覚に依存しているために、強固たる固定した定義を持っていなかった²。アウグスト・シュマルゾーは境界線には視覚的性質と触覚的性質があると言及し、以下のように述べる。

単に視覚的であって触覚的ではない一方だけの性質は、事物を素朴に判断するためにはまったく頼りにならないということがおのずから分かる。(アウグスト・シュマルゾー、訳・井面信行、『芸術学の基礎概念』、中央公論美術出版、2005、p. 111)

つまり境界線を視覚にのみ依存するのではなく、触覚、物質性にも依存する必要がある。物質性とはモノに固有の形であり、形は他から区別をつけるための好都合な手段とされる³。そこで本研究における線分の定義を以下に記述する。

線分とは隣り合う部材と区別するための境界線を示し、具体的には建築立面を構成する各部材の輪郭線を示す。

具体的には図 1-a のように部材が交差することによって生じる奥行きによる輪郭線や、図 1-b のように同一平面状にあるが異素材同士の境界に生じる輪郭線を示す。また、図 1-c のように同一素材でも溝が深く、陰影線が明確に把握できるものは境界線として扱う。

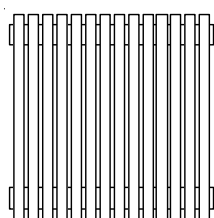


図 3-a

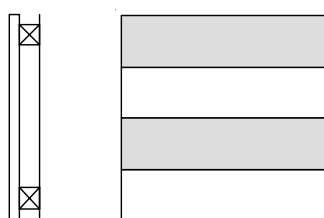


図 1-b

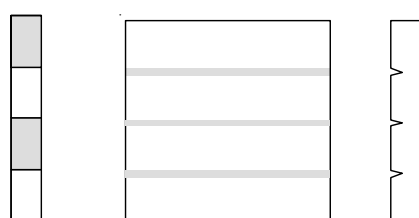


図 1-c

※ 図の左側は立面図を示し、右側は断面図を示す

3.2. 面の構成

面とは上記における線分によって囲まれた領域を示し、物質の質料を示す。質料には色と肌理と呼ばれる物質の表面に表れる微小な構造が含まれると考えられ、本研究ではこのうち肌理に着目し、装飾度の決定要素とする。また本研究では図面化の際に線分として認識できなかった不明確な線を、物質の表面に存在する肌理と同様に扱う。不明確な線を肌理として扱うにあたり、以下に記述する E. H. ゴンブリッチによる主張を参考とした。

すなわち現実では必要とあらばいつでも、望遠鏡や拡大鏡などの人工器具を用いてさらによく見て探れるのに対して、画像として捉えた内容は厳しく限定されているということである。それを拡大すると、像ではなくなり、テクスチャの物質でしかなくなってしまう。(E. H. ゴンブリッチ、訳・白石和也、『装飾芸術論』、岩崎美術社、1989、p. 196)

幾何学的な面で分解した諸要素の組み合わせ、いわば小さすぎたり、過密すぎたり、見る人から離れすぎているものはすべて必然的にテクスチャの印象に溶け込んでしまう。(E. H. ゴンブリッチ、訳・白石和也、『装飾芸術論』、岩崎美術社、1989、p. 196)

これらの記述より、高層建築の仕上げ材に使用されるタイルの目地(図 2-a)、同一素材で溝による陰影線が明確でないもの(図 2-b)を面に表れる肌理として扱う。

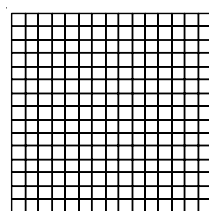


図 2-a

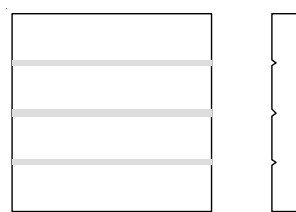


図 4-b

※図の左側は立面図を示し、右側は断面図を示す

3.3. データの作成方法

3.3.1. 撮影・図化方法

本研究は分析対象が広域かつ、高さを有していることから写真測量による立面作成が適していると考えられる。そこで立面図を作成するにあたり「建造物写真測量の方法論—西洋建築史研究の方法論」（前野まさる、『建造物写真測量の方法論—西洋建築史研究の方法論』、建築雑誌、vol. 97、No. 1200、p. 32-33、1982）による写真測量方法を参考として分析対象の撮影、図化を行う。

一様な撮影条件(表 1)のもと対象となる建築の立面を、図 3 のように通りをはさんで向かい側(約 17m)から撮影を行う。撮影には左右対称のステレオカメラを用いるのが適切とされるが⁴、本研究においては撮影箇所を建築の左端、中央、右端と最低 3 点以上設けることによって考慮をする。撮影日時は平成 19 年 10 月 18 日の 13:00 から 15:00 の 2 時間、天候は曇天であった。

また立面図を作成する際に元となる寸法が必要となる。対象の立面の幅は実計測を行い、高さ(Y)に関しては図 4 のように視点場から最上端までの距離(R)をレーザー距離センサーによって測量し、ピタゴラスの定理により導く。

以上より得られた写真と寸法をもとに立面図の作成を行う。立面図は 3.1. にて定義した線分のみを抽出して作図を行う。立面図は cad ソフトを使用し縮尺：1/100、単位：mm で作成する。また、正確な実測を行うことができなかった箇所⁵は図面化の対象から除外

表 1 撮影条件

使用カメラ:Pentax K10D
焦点距離:28.5mm(35mm換算)
F値:11
シャッタースピード:1/50
撮影距離:17m
三脚の高さ:1.7m

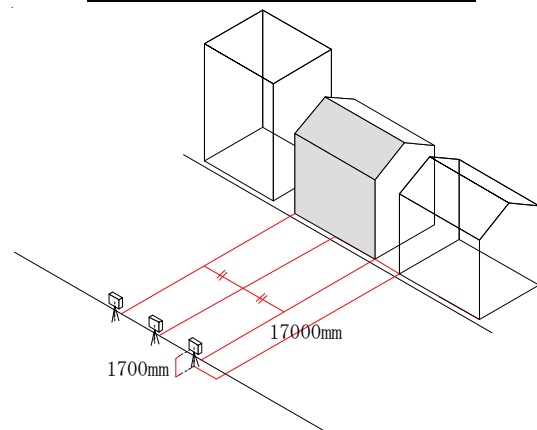


図 3 撮影方法

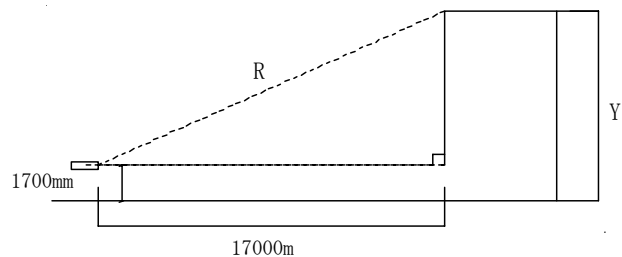


図 4 計測方法

した。

3.3.2. 点装飾度の定義と算定方法

点装飾度とは物質の形式に依存した数値を示す。点装飾度の決定要因を線分の交差する点、すなわち交点の個数とした。

得られた立面図をもとに点装飾度の算定を行う。立面図より交点の個数を計測し、すべての交点の個数の総和を求める。交点の個数の総計値を建築立面の表面積(以下、表面積)で除算した値を求め、点装飾度と呼称する。

3.3.3. 線装飾度の定義と算定方法

線装飾度とは点装飾度と同様、物質の形式に依存した数値を示す。線装飾度の決定要因を線分の長さとした。

得られた立面図をもとに線装飾度の算定を行う。Cad ソフト上で立面図より線分の長さを計測し、すべての線分の長さの総和を求める。線分の長さの総和を表面積で除算した値を求め、線分装飾度と呼称する。

3.3.4. 面装飾度の定義と算定方法

面装飾度とは物質の質料に依存した数値を示す。質料の色彩要素を除外し、肌理が物質の表面につくる陰影のばらつきを標準偏差値として面装飾度の決定要因とした。

質料の分析を行うにあたり、画像の加工を行う。以下に加工工程を記す。

- ① 図化する際に使用した立面写真の画像データ(図 5-a)を Photoshop 上で開き、グレースケール化した後に輪郭検出の加工を行う(図 5-b)。画像の加工を行うことで素材の肌理の輪郭線を強調するとともに、色彩の要素を排除する。図 5-c は加工後の画像の一部を拡大したものである。
- ② 立面を構成する素材の面を一つずつ範囲選択し、ヒストグラムの標準偏差値を計測する。
- ③ 立面を構成するすべての素材の標準偏差値と面積を乗算し、総和を表面積で除算した値を求め、面装飾度と呼称する。



図 5-a



図 5-b

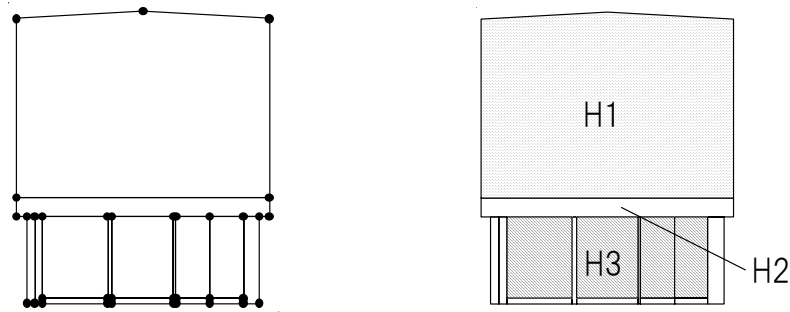


図 5-c

3.3.5. データの作例

分析対象 92 棟すべてにおいてデータを作成する。図 6 はデータの作例である。

次章より点装飾度、線装飾度、面装飾度を用いた分析を行う。



素材名	面積	標準偏差値Av.	面積×標準偏差値Av.
H1	41342570.1	2.756666667	1139676849
H2	4306104.6	5.153333333	2219079237
柱	2442809.3	5.44	1328888259
サッシ	1361299.8	6.493333333	8839373.368
H3	14272283.8	1	14272283.8

立面番号		分類	表面積
西側立面図44		D	637250067.6
交点数	点装飾度	平均値	相対点装飾度
34	5.33543E-08	1.75013E-05	0.003048588
Σ 辺の長さ	線装飾度	平均値	相対線装飾度
73973.4	0.000116082	0.0065092	0.017833561
Σ 標準偏差値×面積	面装飾度	平均値	相対面装飾度
172559017	0.270786973	10.61422488	0.025511705

図 6 データの作例

1 ハイน์リヒ・ヴェルフリン 訳・海津忠雄 『美術史の基礎概念—近世美術における様式発展の問題』
慶応義塾大学出版会 2000

2 クレメント・グリーンバーグ 訳・藤枝晃雄 『グリーンバーグ批評選集』 勁草書房 2005

3 アウグスト・シュマルプー 訳・井面信行 『芸術学の基礎概念』 中央公論美術出版 2005

4 前野まさる 『建造物写真測量の方法論—西洋建築史研究の方法論』 建築雑誌、vol. 97、No. 1200、
p. 32-33、1982

5 ①一階部分に商品が陳列されており、商品によって立面が隠されている箇所。

②シャッターによって立面が隠されている箇所。

第4章

分析・考察

- 4.1. 分析概要
- 4.2. 相対点装飾度と相対線装飾度の関係性
- 4.3. 相対線装飾度による分析
- 4.4. 相対線装飾度と相対面装飾度による分析

4.5. 装飾度からみた街路景観属性

4.1. 分析概要

街路景観を構成する街路における建築立面の調査を行い、前章において提示したデータの作成方法をもとに各装飾度を求める。本研究では善光寺表参道中央通を対象街路として選定し、大門交差点から昭和通との交差点までの約700mの範囲にある建築立面92棟分を分析対象としている。通りを境に分析対象を東西に分け、それぞれ東側立面図、西側立面図と表記する。また対象街路の最北端(善光寺側)から順番に番号を付ける(図1)。以下、分析対象を東側立面図1、東側立面図2…また西側立面図1、西側立面図2…と表記する。

分析対象すべての点装飾度、線装飾度、面装飾度を算出した結果、各々の装飾度は絶対数である為に、互いの数値に差が大きくみられた。絶対数のままでは各装飾度間における関係性を把握することが困難であった為に、各装飾度の相対数を求めることで各装飾度間の数値の差を減少させた。相対数の算出方法を以下に記述する。

- ① 点装飾度、線装飾度、面装飾度の対象分析全体における各々の平均値を求める。
- ② 各建物の点装飾度、線装飾度、面装飾度をそれぞれ求めた平均値で除算する。

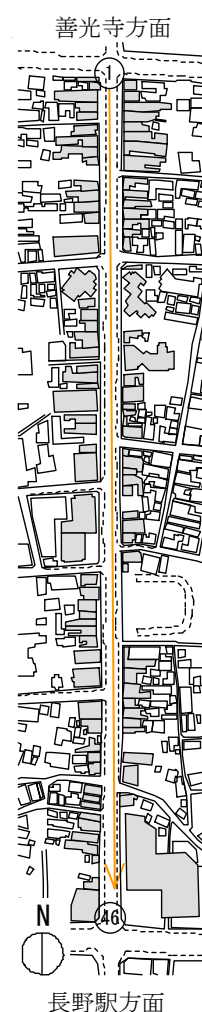


図1 分析対象配置図

以上の工程よりより求めた数値を分析対象街路における街路景観属性の要素とする。また求めた相対数をそれぞれ相対点装飾度、相対線装飾度、相対面装飾度と呼称し、以下これらの数値を用いた分析を行う。4.2. では物質の形式に依存した数値である相対点装飾度と相対線装飾度の比較分析を行う。4.3. では相対線装飾度のみに着目し、分析を行う。ここでは街路景観属性を示す数値を算出している。4.4. では相対線装飾度と相対面装飾度の2つの観点より分析対象を4分類する。最後に4.5. では相対線装飾度と相対面装飾度の総和を用いて対象街路における街路景観属性の一端を明らかにする。以上の分析結果より分析対象街路における街路景観属性を把握し、考察を行う。

4.2. 相対点装飾度と相対線装飾度の関係性

ここでは物質の形式に依存した相対点装飾度と相対線装飾度の関係性を把握する。図 2 は X 軸に立面番号、左側 Y 軸に相対点装飾度、右側 Y 軸に相対線装飾度を図化したものである。図 2 より相対点装飾度と相対線装飾度には相関関係があるように見える。そこで相対点装飾度と相対線装飾度の相関関係を調べるためにエクセルの分析ツールにて解析をかける。ここで相関係数が 0.7 以上を示すことが出来れば強い相関関係があるということができ、対象街路においては相関係数が 0.756 を示した。これより分析対象街路においては相対点装飾度と相対線装飾度には強い相関関係があるといえよう。また相対線装飾度が相対点装飾度を上回る建物が多いたことが分かる。分析対象街路が一つである為に比較分析はできないが、分析対象街路においては相対線装飾度が相対点装飾度を上回る傾向にあるといえよう。

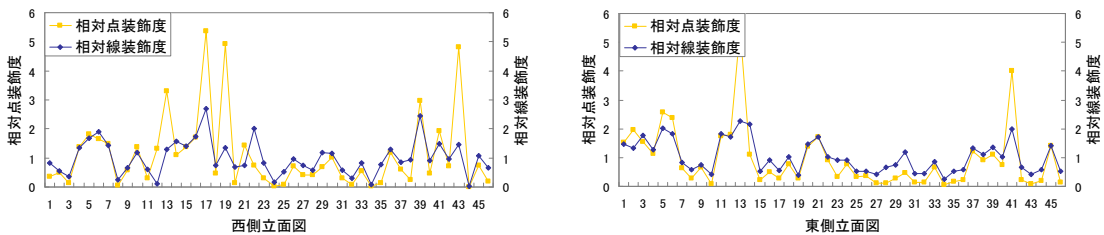


図 2 相対点装飾度と相対面装飾度の比較

ここでは対象街路において異質とされる建物、つまり相対点装飾度が相対線装飾度を上回る傾向が顕著に示された建物 6 棟に着目し、相対点装飾度を上げる発生原因を見出す。

4.2.1 分析方法

分析対象となる建物の立面図より総交点数を求め、さらに 2 線交点、3 線交点、4 線交点の三種類(図 3)に分け、各交点の種類の数を集計する。さらに対象街路すべてにおける建物(92 棟)の交点数、2 線交点数、3 線交点数、4 線交点数の平均値を求める。その上で各交点の種類が総交点数に占める割合を算出し、分析対象と対象街路における平均値との比較分析を行う。

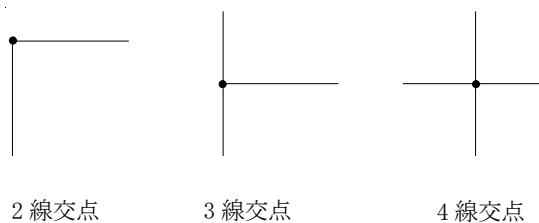


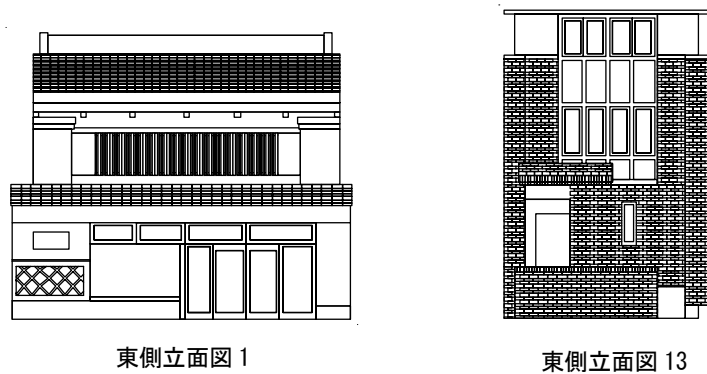
図 3 交点の種類

4.2.2. 結果・考察

総交点数における種類別の交点数が占める比率は表1の結果となった。相対点装飾度が相対線装飾度を上回る分析対象(6棟)において、対象街路におけるすべての建物(92棟)の平均値と比較したところ2線結合と3線結合の占める比率が高いことが分かった。一方4線結合数は極端に低いことが分かる。図4の事例のように2線結合と3線結合は格子やタイル目地に多く見られる傾向にある。また4線結合は瓦屋根に多く見られる傾向にあり、これらのことから相対点装飾度が相対面装飾度を上回る建物の立面には格子やタイル目地が取り付けられている場合が多いといえよう。

表1 種類別交点比率

立面番号	2線結合 比率(%)	3線結合 比率(%)	4線結合 比率(%)	相対点装飾度
東側立面図13	2.5	97.4	0.1	5.48
東側立面図41	39.8	60.2	0	4.01
西側立面図13	1.9	98.1	0	3.3
西側立面図17	1	81.4	17.6	5.37
西側立面図19	80.8	12.9	6.3	4.92
西側立面図43	0.3	99.7	0	4.81
平均値	22.9	45.2	31.9	1.01



立面番号	2点結合	3点結合	4点結合
東側立面図1	124	789	830
東側立面図13	107	4150	2

図4 事例

以上の結果から対象街路においては1.) 相対点装飾度と相対線装飾度に相関関係があること2.) 相対線装飾度が相対点装飾度を上回る傾向にあること3.) 相対点装飾度が相対線装飾度を上回る場合には建物の立面に格子やタイル目地が確認できることが分かった。

4.3. 相対線装飾度による分析

4.3.1. 相対線装飾度による分析—その1—

4.2. より相対点装飾度と相対線装飾度には相関関係があることが分かり、また分析対象においては相対線装飾度が相対点装飾度を上回る傾向にあることが分かった。よって物質の形を定量数値化したものを相対線装飾度として分析を行う。

対象街路において瓦屋根を持つ建物は92棟中40棟である。瓦を持つ建物は瓦の枚数から、相対線装飾度が高い数値を示すことが予想される。また分析対象街路においては瓦以外に格子、タイル目地を建築立面に所有する建物の線装飾度は高い数値を示すことが予想される。よってこれら3要素を持つ対象50棟について分析を行う。

4.3.1.1. 分析方法

分析対象について上記した3要素の表面積における面積比率と相対線装飾度の関係性を分析する。各要素が表面積に占める面積比率を10%ごとに分け、分類する。分類ごとに建物の相対線装飾度の平均値を求める。

4.3.1.2. 結果・考察

表2はこれらの各要素が表面積に占める面積比率を10%ごとに示している。表2から読み取ることができるように各部材の面積比率が増加するとともに相対線装飾度が増加しており、面積比率が40%を超える時点で相対線装飾度は急増する。また対象街路において面積比率が40%を超えるのは格子やタイル目地を所有する建物のみであった。対象とした建物50棟の相対線装飾度の平均値は1.60を示し、この値と各面積比率の相対線装飾度の平均値を比較すると、各要素の面積比率が20%から40%に範囲にある建物の相対線装飾度の平均値が1.60の近似値を示した。また面積比率が20%から40%の範囲には瓦を所持する建物が最も多い。以上より相対線装飾度の観点から対象街路を分析した場合、20%から40%の面積比率を所有する瓦屋根が対象街路における相対線装飾度の主たる決定要素となる。

表2 各要素の面積比率と線装飾度

面積比率 (%)	瓦 (建物数)	格子 (建物数)	タイル目地 (建物数)	相対線装飾度平均値
0%~	8	4	0	0.848
10%~	9	3	1	1.213
20%~	11	0	1	1.652
30%~	12	1	1	1.676
40%~	0	1	2	2.274
50%~	0	0	2	2.571

4.3.2. 相対線装飾度による分析—その2—

4.3.1.において相対線装飾度が高いとされる瓦、格子、タイル目地の3要素を所有する建物について建築立面における面積比率の観点から分析を行った。そこから面積比率が20%から40%を占める瓦屋根を持つ建物が対象街路における相対線装飾度の主たる決定要因となることが分かった。そこで今回は多数の線装飾度を生み出すと考えられる要素の種類を増やし、92棟すべてを分析対象として考察を行う。

4.3.2.1. 分析方法

相対線装飾度を分析する上で、あるまとまった量の線分を生み出す構成形式に着目する。それを線分構成形式と呼称し、対象街路における線分構成形式として瓦、格子、トタン、タイル、パネル、サッシの6形式を抽出する。その上で対象街路における各線分構成形式の線分の長さの総和を、対象街路におけるすべての建築立面の線分の長さの総和で除算した値を求め、線分構成比率と呼称する。対象街路において線分構成比率の高い線分構成形式を所有する建物すべての相対線装飾度の平均値を、分析対象全体の相対線装飾度の平均値と共に街路景観属性を示す数値として提示する。

4.3.2.2. 結果・考察

各線分構成形式の線分構成比率と各線分構成形式を所有する建物の相対線装飾度の平均値を算出し、双方を同一のグラフに示したものが図5である。図5より対象街路においては、線分構成形式としては瓦とサッシの線分構成比率が他の線分構成形式の線分構成比率と比べて高い数値を示している。線分構成比率が高い

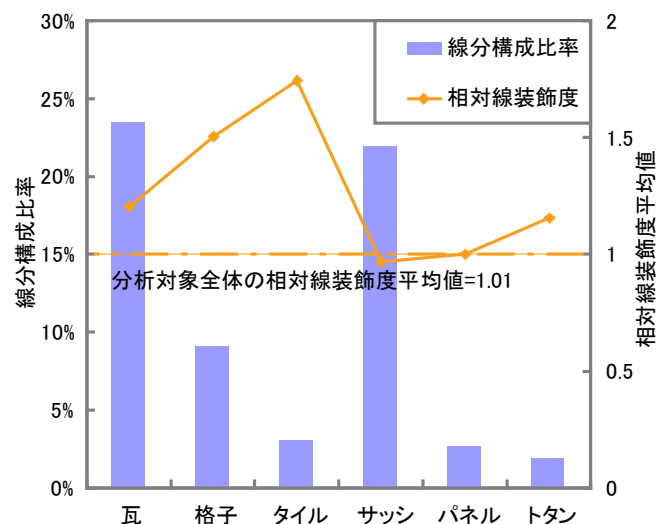


図5 線分構成比率と相対線装飾度平均値

ということの対象街路において視覚の支配的要素であるといえる。支配的要素の相対線装飾度の平均値は瓦が1.203であり、サッシが0.968を示しており、これらの数値は分析対象全体の相対線装飾度の平均値であ

る 1.01 とともに対象街路の装飾度を代表する数値といえよう。

4.4. 相対線装飾度と相対面装飾度による分析

相対線装飾度のみから街路景観を考察した場合、線分構成形式の線分構成比率に依存するものであった。それは結果として建物の様式に依存する結果となったといえる。そこで相対線装飾度に相対面装飾度の観点を加え、2つの指標から分析対象を分類する。相対線装飾度の平均値(1.01)と相対面装飾度の平均値(0.99)を基準として分析対象を以下の4つに分類し、表3に分類ごとの相対線装飾度、相対面装飾度、相対線装飾度と相対面装飾度の合計値(以下、装飾度と呼称する)、建物数を表3に示す。

- ・ 分類A:相対線装飾度と相対面装飾度がともに平均値を上回る建物。
- ・ 分類B:相対線装飾度のみ平均値を上回る建物。
- ・ 分類C:相対面装飾度のみ平均値を上回る建物。
- ・ 分類D:相対線装飾度と相対面装飾度がともに平均値を下回る建物。

表3 分類ごとのデータ

	分類A	分類B	分類C	分類D
相対線装飾度	1.534055333	1.558436032	0.559962092	0.619059482
相対面装飾度	1.206816656	0.717466694	2.057558185	0.516178502
装飾度	2.74087199	2.275902726	2.617520277	1.135237984
建物数	20	20	17	35

4.4.1. 分析方法

分析対象92棟すべてを分類し、分類ごとに相対線装飾度と相対面装飾度の平均値を求める。分類ごとの相対線装飾度の平均値と相対面装飾度の平均値を総和した値を求め、分類ごとに値の比較を行う。

4.4.2. 結果・考察

図6は分類ごとに相対線装飾度と相対面装飾度を合計した値を図化したものである。相対線装飾度のみを比較した場合、分類Aと分類Bに対して分類Cは数値に開きがあるが相対面装飾度を加えることで分類A、分類Bと近似値を示す。この結果より、対象街路における装飾度は分類A、分類B、分類Cが相対的に数値を上げる一方で分類Dが数値を下げる傾向にあるといえる。また図6から分類Cの相対面装飾度は高い数値を示していることが

分かる。よって装飾度の観点からすれば分類Dは対象街路において異質な性格を所有した建物群であるといえよう。

表4は対象街路において見られる分類ごとの建物の事例をまとめたものである。対象街路において分類Aが92棟中20棟、分類Bは90棟中20棟あり、この中には瓦屋根を持つ蔵造りの建物が多く見られた。分類Aにおいては蔵造り以外にRCがそのまま外壁の表面として用いられているものや、風化したタイルなどが仕上げ材として用いられているものがある。この中には大正時代に建設された近代建築が含まれており、建物の様式の観点からは蔵造りの建物とは決して同一の分類がされることはなかったが、装飾度の観点からすれば同分類となる。分類Cは90棟中15棟あり、この分類には蔵造りの建物は含まれなかった。分類Cに含まれる建物には多様な種類の形体が確

認されたが、中でもモダニズム建築といわれる建物が多かった。表4にある分類Cと分類Dを比較すると立面図のみを見たときには区別が困難であるが、表層を見てみるとその差異は明らかである。分類Cの表層は肌理の粗い仕上げになっているものが多く、視覚的に把握することが出来る。しかし分類Cと分類Dの差異があるにも関わらず、建築の様式のみ観点ではこれらの差異を見逃すこととなる。

以上より相対線装飾度と相対面装飾度の2つの観点から建物形式を4つに分類することが出来た。

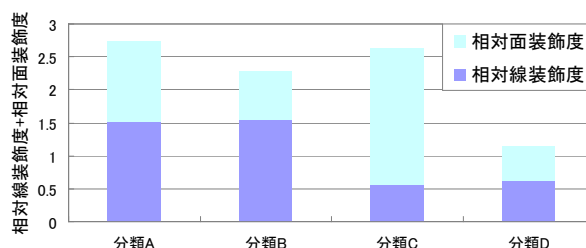


図6 分類ごとの装飾度

表4 分類事例

分類A		分類B	
西側立面図13		西側立面図43	
	相対線装飾度		相対線装飾度
	1.29		1.45
	相対面装飾度		相対面装飾度
	1.41		0.34
合計値		合計値	
2.7		1.79	
分類C		分類D	
東側立面図31		東側立面図10	
	相対線装飾度		相対線装飾度
	0.44		0.41
	相対面装飾度		相対面装飾度
	2.34		0.35
合計値		合計値	
2.78		0.76	

4.5. 装飾度からみた街路景観属性

4.4.において相対線装飾度と相対面装飾度の総和を装飾度と呼称し、街路景観属性を把握する一指標として提示した。ここでは対象街路におけるすべての装飾度を把握することで街路景観属性の一端を明らかにする。

4.5.1. 分析方法

分析対象すべてにおいて相対線装飾度と相対面装飾度の総和である装飾度を求める。求めた装飾度を縦軸に、また立面番号を横軸に持つグラフを作成することで、対象街路全体における街路景観属性を視覚的に図として表示する。

4.5.2. 結果・考察

図7は装飾度を縦軸に、立面番号を横軸に持つグラフである。また補助線 i は対象街路全体における装飾度の線形近似を示しており、これによって装飾度による街路景観属性を簡略化した勾配として把握することが出来る。補助線 i は東側立面図と西側立面図双方において北から南に向かって減少傾向にあることが示される。これは北部（善光寺方面）の装飾度が高く、南部（市街地方面）に向かうに従い装飾度が低くなることを示す。これは善光寺周辺において歴史的な様式(土蔵造り)の建物が多いことが装飾度を上げている原因であると考えられる。これらの建物には瓦屋根、格子といった線分構成形式が多く取り付けられていることが確認でき、相対線装飾度を上げる要因となっているといえよう。

また図7の枠組 I は対象街路の最北部にある一区画を示しており、ここでは近年において都市計画が進められ、新しく建物が建設されている。東側では既に土蔵造りの建物群(図8 左端から6番目まで)が建設されており、これらの建築を含む枠組 I を除く範囲の装飾度の線形近似(補助線 ii)は補助線 i と同一の勾配を示した。東側の枠組 I にはパティオ大門と呼ばれる商業施設が存在する。この施設は明治から大正時代に建てられた空き家となっていた商家や使われていない土蔵、また庭を備えた3階建ての家屋などを取得し複合商業施設として再生したものである。一方、開発途中の西側では補助線 ii に対して補助線 i の勾配が緩やかになっていることが分かる。これは西側の枠組 I にある建物の装飾度が、枠組 I を除く範囲における街路景観属性の流れに対して小さな値を示していることになる。

装飾度の観点に着目し、今後進められる西側の枠組 I において装飾度を上げることが街路景観の向上に繋がるのではないかと考える。その意味で都市計画において装飾度が街路

設計の指標となるといえよう。

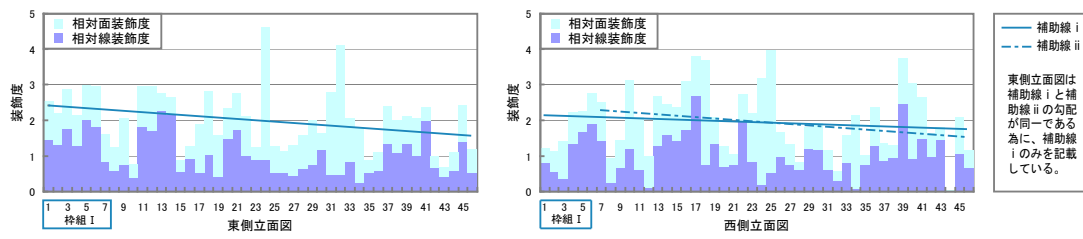


図 7 装飾度と立面番号



図 8 連続立面図 (一部)

第 5 章

結

5.1. 結

以上より装飾度を用いて善光寺表参道中央通の街路景観属性を示した。そこから 1.) 相対線装飾度とそれを生み出す線分構成形式より街路景観属性を代表する数値を示した。また 2.) 相対線装飾度と相対面装飾度という 2 つの観点から建物形式が 4 つに分類できた。さらに 3.) 対象街路の装飾度は北部(善光寺方面)から南部(長野駅方面)に向けて減少傾向にあることが分かった。このような装飾度による分析は街路景観属性の一端を明らかにするのみではなく、街路設計における設計指標となり得るものとする。

あとがき

卒業論文のテーマである『装飾論』を通して装飾に含まれる多くの概念に苦心した。海野弘は装飾における意味・内容と形式という対概念に着目し、両者の合一が装飾の本質を語る上で不可欠としている。しかし20世紀における装飾論はモダニズムにおける「純粹化」を辿り、形式に注目が集められた。そこで私は装飾の内容とは何かという宿儀を抱きながらも、装飾の形式を受け継いだとされる抽象美術の動向を探ることにした。ここにおいて装飾における形式が保持するもう一つの対概念の存在を看取することになった。それは質料と呼ばれ、美術界における形式主義において注目された概念であった。形には内容に対する形式と質料に対する形相という対概念が存在し、クレメント・グリーンバーグの形式主義はこのうちの内容のみを排除した。グリーンバーグの形式主義にはカント美学の背景が存在するとされるがカントは形式のみを美の対象としている。このことから質料を美の対象として扱ったグリーンバーグの形式主義は独創的なものであったといえよう。そしてここにおいて装飾の意味・内容なる存在として美術作品が持つ「効果」という存在が浮かび上がった。グリーンバーグは作品の質をすなわち内容としており、また内容とは作品が視覚を通して与える効果であるとしている。またその効果が表れるのは形式ではなく質料であるとしており、このことから質料が視覚に与える影響について検討する必要があると考えた。

参考文献

- ・ エイドリアン・フォーティー 訳・坂牛卓、邊見浩久 『言葉と建築—語彙体系としてのモダニズム』 鹿島出版会 2006
- ・ 矢代眞己、田所辰之助、濱寄良美 『20世紀の空間デザイン』 彰国社 2003
- ・ 尾崎信一郎 「モダニズム美術と視覚性—グリーンバーグ、フリード、クラウス、ブライソンの批評に即して—」 藤枝晃雄・谷川渥 『芸術理論の現在—モダニズムから』 東信堂 1999
- ・ 坂牛卓、谷川渥 「建築の質料とモダニズム—美学のフィールドからの視線」 谷川渥 『芸術の宇宙誌—谷川渥対談集』 右文書院 2003
- ・ 山崎正和 『装飾とデザイン』 中央公論新社 2007
- ・ 谷川渥 『美のバロキスム—芸術学講義』 武蔵野美術大学出版局 2006
- ・ 小林計一郎 『善光寺と長野の歴史』 光風舎 2003
- ・ 藤本利治 『門前町』 古今書院 1970
- ・ 伊藤恭行 『都市的街路景観の定量的研究—1—』 日本建築学会大会学術講演梗概集(九州) Vol.1989 p.75-76
- ・ 井上知也 『心理量の〔形態〕・〔素材〕の分析—街路景観の「ゆらぎ」の研究』 日本建築学会大会学術講演梗概集 Vol.1998 p.923-924
- ・ 稲垣卓造 『色彩を刺激要因に含んだ街路景観の評価について』 日本色彩学会誌 Vol.14 No.2 p.122-130 1990
- ・ 木多道宏 『街路景観における色彩の心理効果：連続する建物群の基調色および単一建物の強調色の変化「まとまり」評価等との関係』 日本建築学計画系論文集 No.522 p.239-246 1999
- ・ 芦原義信 『街並みの美学』 岩波書店 2001
- ・ 川崎寧史 『建築壁画画像のテクスチャ解析に関する研究』 日本建築学会環境系論文集 No.566 p.111-118 2003
- ・ アウグスト・シュマルゾー 訳・井面信行 『芸術学の基礎概念』 中央公論美術出版 2005
- ・ 川田都樹子 「フォーマリズム批評の理論—グリーンバーグの場合—」 藤枝晃夫、谷川渥 『芸術理論の現在—モダニズムから』 東信堂 1999
- ・ ハーバード・リード 訳・勝見勝 『インダストリアル・デザイン』 みすず書房 1957
- ・ 海野弘 『装飾空間論』 美術出版社 1973
- ・ ロバート・ヴェンチューリ 訳・伊藤公文 『建築の多様性と対立性』 鹿島出版会 1982
- ・ ロバート・ヴェンチューリ 訳・伊藤公文 『ラスベガス』 鹿島出版会 1978
- ・ クレメント・グリーンバーグ 訳・藤枝晃夫 『グリーンバーグ批評選集』 勁草書房 2005

- ・ 黒崎政男 『カント「純粹理性批判」入門』 講談社 2000
- ・ 山口義久 『アリストテレス入門』 筑摩書房 2001
- ・ ハインリヒ・ヴェルフリン 訳・海津忠雄 『美術史の基礎概念—近世美術における様式発展の問題』
慶応義塾大学出版会 2000
- ・ ル・コルビュジエ 訳・前川國男 『今日の装飾芸術』 鹿島出版会 1966
- ・ アドルフ・ロース 『装飾と犯罪』 訳・伊藤哲夫 中央公論美術出版 2005
- ・ 後藤武 『特集—アドルフ・ロース再読』 彰国社 2002
- ・ 五十嵐太郎 「表層から建築を考えれば」 『特集—「表層」の予感』 TOTO 通信 2007
- ・ 鶴岡真弓 『「装飾」の美術文明史—ヨーロッパ・ケルト、イスラームから日本へ』 日本放送出版
協会 2004
- ・ 前野まさる 『建造物写真測量の方法論—西洋建築史研究の方法論』 建築雑誌 Vol.97 No.1200
1982
- ・ E. H. ゴンブリッチ 訳・白石和也 『装飾芸術論』 岩崎美術社 1989